この裂片が上下に広く開いている。この開いている裂片の内側をつつくと急速に閉じる。昆虫の体から花粉を受け取るための手段と考えられる。*Lindenbergia* の花柱の先は頭状であって，上記の受粉手段とは無関係な構造である。胚乳の出来方はオオアブノメ連のものとは関係なく，やや異なるがジオウ属のものと似ている。花冠裂片の重なり方，花柱の先の形などから考えて，*Lindenbergia* はシオガマギク亜科のジオウ属を含むジギタリス連に属すものと考える。この連の中では特殊化の進んだ属である。

○四国のカワヤナギ（山中二男） Tsugiwo YAMANAKA: *Salix gilgiana* Seemen in Shikoku

カワヤナギ（*Salix gilgiana* Seemen）の分布は，四国の川原や湿地の植生をしらべついて，以前から気になっていたことの一つである。このヤナギは四国にも自生することになってはいるが，どうも疑問に思えたので，そのことを木村有香先生におたずねした。すると，先生のところには九州の標本はないが，四国のものは1枚だけあるというご返事と，その標本のゼロックスコピーをいただいた。

四国の標本には，土佐国土佐郡鴨田村河ノ瀬で吉永虎馬氏が1934年9月9日に採集されたラベルがある。河ノ瀬（ごうのせ）は鴨田村ではなく潮江村で，1926年に高知市に入っているから，おそらくそこと鴨田村（1942年に高知市に合併）との境のあたりで採られたものと思う。それからちょうど50年後の1984年のおなじ日は，やはり日曜日で，何度か歩いたことのある高知市河ノ瀬町とその周辺をあらためてくわしく見てまわった。しかし，環境もすっかり変わって，カワヤナギを見ることができなかった。

その後，気をつけてみると，四国ではカワヤナギがよく栽培され，野生状のものも各県で見られることがわかった。いま手もとにあるカワヤナギの標本のうち，野生状態とみなして採集したところをあげると，徳島県鴨島町知恵島，川島町城山，香川県満濃町岸ノ上と真野，愛媛県砥部町宮内，宇和町坂戸と下坂戸，高知県野市町仁尾島と深淵がある。

だが，これだけで，カワヤナギが四国にも自生していたとは断言できそうにない。かつての河ノ瀬もそうであったと思うが，カワヤナギが生えているのはおもに人家の近くである（図1）。徳島県の吉野川や高知県の物部川の川原にもあるが，ジャヤナギ，アカメヤナギまたはタチヤナギのように普通ではなく，個体数もきわめて少ない。近くやおなじところにコリヤナギ，トキワサンザシ，ナンキンハゼなどが野生化していることもあり，カワヤナギもそれらと同様に，逸出の可能性が大きいことを否定できない。たしかに四国まではあるが，九州に分布していないヤナギには，バッコヤナギ，オノエヤナギそれにヨシノヤナギがあり，カワヤナギもおなじように四国には自生していてもお

図 1. 香川県満濃町に野生するカワヤナギ. *Salix gilgiana* growing wild in Mannô, Kagawa Prefecture, Shikoku.

かしくない。だが，もし自生があるとするなら，もっと広い範囲で，しかも自然状態の植生がよく残っているところに見られてよいはずである。このような状況では，もともと九州のみでなく四国も，カワヤナギの分布域をはずれていたとみなすのがよいのではなかろうか。

なお，本誌にイヌコリヤナギも四国には分布していないのではないかと書いたが（山中 1984），その後まだ自生と思われるものは見つかっていない。ただ，その際ふれたように，このヤナギもよく植えていて，近年になって高知市では，鏡川の川原に野生化した雌株のあることがわかったのを付記しておく。

終わりに，ご教示いただいた木村先生にあつく感謝する。　（高知大学教育学部）

□滝田謙譲：**東北海道の植物**　1116 pp. 1987. 自費出版（釧路市武佐 2-34-21. 電話 0154-46-3490. 振替小樽 1-4331）. ¥10,000（送料 ¥500）. 著者が中学校の教職のかたわら描いた植物 1,100 図に，記相文と準拠標本の引用を付す。標本は京大と釧路郷土博物館に納められている。図は小形のもの以外はＢ５版一頁に一種で，細部に少々ぎこちない点はあるが，たいへん立派なものである。採集地域は北海道の知床・阿寒・釧路を結ぶ線以東である。残部は少ないが，希望者は直接申し込まれたい。　（金井弘夫）